

#### (4) 大坪の場合

##### 1 はじめに

4年連続の無人島キャンプとなった。1年目のころが嘘のように準備がはかどる。何が要るか要らないか。何を持っていくとより便利かなどのイメージが湧く。今回準備した新たなアイテムはテーブルだ。これを使って調理やコーヒーを飲むのが楽しみだ。毎回のごとくワクワクしながら、キャンプ当日を迎えた。

##### 2 いざ無人島へ

いつも通り古仁屋の港へ行き、いつも通りのおじさんに船で迎えに来てもらった。天気は快晴。風も心地よい。これならハンミヤ島へ行けるのではないかと期待に胸を膨らませていたが、やはり無理だと船長から話を聞いた。これもまたいつも通り。仕方ない。

今回行く無人島は2択。1つは夕離島。もう1つは須子茂離島というところらしい。青い海の上を波しぶきを上げながら船が走る。すると船長が指をさしながら『○×△※&』と何か叫んだ。その方角を見てみたところ何かの尾びれが海へ入っていくのが見えた。どうやらホオジロザメだったらしい。どれほどレアなことなのかいまいち価値が分からないが、記念に良いものを見ることができた。



写真1 荷物積み込み

##### 3 夕離島から須子茂離島へ上陸

夕離島へ上陸した。とりあえず下りてみて、キャンプができるかどうかを確認しろとのことだった。砂浜に行くまでの岩場が水につかっており、多くの荷物を運び出すには厳しい状態だったため断念した。しかし、岩の中にピンク色のサンゴがあり、ここはここできれいな場所だったため、心の中で次のキャンプ場が決定した。次に着いた須子茂離島は砂浜も広く、波も穏やかで素晴らしい環境であった。船を浜にできる限り近づけ、はしごを下ろし、先に降りた仲間に次々に荷物を渡していく。キャンプでは自分のことは自分で、自由にやるのが基本だが、仲間がいれば助け合うことができる。仲間の素晴らしさを感じられることもキャンプの醍醐味だ。

荷物を完全に運び終え、少しばかり散策をした。長く続く砂浜を歩いているとあることに気付いた。私たちの夜のお楽しみに絶対不可欠な流木が少ない。また、陰になるような樹木がなく、真夏に来ていたら暑さにやられていただろうと少し怖くなった。



写真2 船上にて



写真3 無人島上陸

##### 4 住処の確保

散策からしばらくして、テントを張る作業を行った。私は大きな岩の後ろあたりを陣取り、設営をした。初めのころは誰かに手伝ってもらわないとテントを張ることはできなかったが、さすがに4回目となると簡単に立てることができた。その後夕食で必要となるライトを取りつける場所の確保だ。し



写真4 岩と紐

かしこの須子茂離は簡単にはいかない。周りには岩しかなく紐をくくりつけることができるものが何もないのだ。考えた末、岩に固定するという案になった。幸いここにあった岩は、ごつごつしており、のこぎりの刃のようにとがった部分がある。ここに紐を引っ掛けて、反対側にある岩壁の突起部分とつないだ。あとはかまどを作るだけでベースキャンプの設営は完了だ。かまどの作り方は毎回同じなので今回は割愛する。

## 5 自由時間

とうとうこの時間がやってきた。何をしてもいい時間。私は小腹がすいていたので、海を見ながら軽くラーメンを食べた。大谷氏が釣竿を持ってきていたので、小菌氏がそれを借り、釣りへと出かけた。『ヤドカリを餌にすると魚が食らいつく』との情報で大冨氏がやどかりから宿を奪っている。小菌氏はそれを針につけ釣っている。何回か当たりは来るもののなかなか釣れないらしい。撒き餌もなくやどかり1つで魚を釣るのはかなり困難なようだ。しばらくして貝獲りに出かけた。前々回のキャンプで岩について



写真5 魚釣り

いる平べったい貝が美味であったことを覚えていたためだ。潮が引いている途中であった為、潜りながらの貝取りになったが、なかなか見つけることは出来ず見つけても小さいものばかりであった。潮が引いてから夜に貝探しをすることに決まった。

## 6 宴の時間

あたりが少しずつ暗くなってきた。当たり前だが街灯は一つもないので少しでも周りが見えるうちに夕食をとることとなった。チーム平松が事前に購入してくれていた、肉と野菜を手づくりかまどの上に投入していく。燃料は昼間に拾っておいた流木だ。初めころは木炭を持参していたが、いつの間にか流木を燃料にするのが普通になった。バーナーでは油等が下に落ちるようなものは調理できない。ほとんどの食事が麺類になってしまう為、この焼肉がかなりおいしい。更に感心することが回数を重ねるごとに量が絶妙にちょうど良くなっていることだ。ちょうど満腹感の中、潮が引いてきているとの情報。これは貝獲りに行かねばと、出かけた。岩場に行ってみると昼間にはいなかった貝がたくさん出てきていた。初めのうちは大きいものを取っていたが、大きいものだけだと量が少ないこともあり、とりあえず食べられそうな大きさのものは取るようにした。岩場にいたのは貝だけでなく、ハゼのような小さな魚もいた。なぜか皆、そのハゼのことを”ぜーやん”と呼ぶ。それほど大きくは無いが、ぜーやんも食べられそうなため、捕獲することとなった。戻ってくると大きめの貝を網の上に載せ、焼いて食べた。鮮度抜群の貝は本当においしかった。さらにおいしかったのが小さな焼き貝とぜーやんなどどとった出汁みそ汁だ。今まで飲んだことのない濃厚な魚介スープ。まさか無人島で味噌汁が飲めるとは思っていなかった。即席みそ汁の味噌をたまたま持ってきてくれていた飯山氏に心から感謝した。下にその調理工程を示す。



～おいしいお味噌汁の作り方～



写真6 貝を焼く



写真7 鍋に入れ茹でる



写真8 コーヒーフィルターでこす

## 7 奇妙な音

おいしい味噌汁を味わい、眠気もちょうどほどよく押し寄せてきた。テントの中に入ると波の音がささやかに聞こえてくる。正直寝る環境に神経質な為、少しでも物音がすると寝られない私は、波の音を聞きながら寝ることなどできない。夜に飲んだお酒の力を借りて眠りについた。しばらくすると用を足したくなったので体を起こすと外から『カサカサ』音がする。テントの近くだ。たまに石と石がぶつかるような音がする。おそろおそろテントの外へ出てみると・・・高さ20cmくらいの石に大量のヤドカリが群がっている。お互いの貝がぶつかるので『カチカチ』と石同士がぶつかるような音がする。たまに石に登り切れずポテッと落ちる奴もいる。そんな姿のヤドカリを見て私は心から思った。

『気持ち悪っ』

全くかわいくもない気持ち悪い集団にしか見えなかった。用を足し終え、そのまま気持ち悪い音を聞きながら、朝を迎えた。

## 8 二日目の朝

朝を迎え少しずつ気温が上がっていく中で目が覚めた。案の定ほとんど寝られていない。実際にはキャンプなど私には向いていないのではないかととも思う。

テントから出ると大谷氏が起きていた。彼はいつも朝が早い。お湯を沸かし、コーヒーを飲んだ。いつも飲んでいるコーヒーも無人島で飲むものはまた格別の美味しさだ。軽く朝食を済ませくつろいでいる間に太陽の熱がどんどん増してきた。そこで大富氏が持ってきていたタープを立てることになった。毎回のことだが砂浜はペグが打ちづらい。砂浜にある大きめの石を運びその石にロープをくくりつけ固定する。暑い中砂浜の石を運ぶ作業は本当に大変ではあったが、日影が無ければ全員ミイラ化する恐れがあったため、避けられない作業であった。その後涼を求めて海へ飛び込んだ。



写真9 タープ内でくつろぐ様子

## 9 鍋で米を炊く

一通り泳ぎ終え、少し早い昼食となった。今回の昼食はカレーだ。いつもならお湯で温めるだけで作れるものを準備するのだが、今回はレベルアップを図るため、お米を持ってきていた。昔聞いたことのある『はじめちよろちよろ なかぱっぱ』のリズムを思い出し、お米を炊いてみた。『はじめちよろちよろ』なので恐らく弱火だと思い弱火で炊いていると、次の『なかぱっぱ』



写真10 鍋で米

がひっかかる。『なか』ってなに？『ぱっぱっ』て何？意味もわからず強火にしているとベしゃベしゃで焦げ付いたお米が出来上がった。細かい意味までしっかりと学んでおくべきだったと後悔した。その上に炊きながら温めたレトルトカレーをかけて食べた。お米さえしっかり炊けていれば、もっと美味しく食べられたのだろうが、私にはこれぐらいが限界だったようだ。炊飯器のありがたみをキャンプでまた学ぶことができた。

## 10 いざハンミヤ島へ

13:00になり迎いの船がやってきた。海上の状態から少しの間であればハンミヤ島へ上陸できるとの情報にテンションが上がりきった。あの写真でしか見た事のない長く続く砂浜の坂をこの目で見る事ができる。船に乗りハンミヤ島へ向かう。いつもであれば無人島から出る時の船上は悲しい気持ちでいっぱいだ。しかし今回は違う。わくわくが止まらず、進行方向に見えてくるであろうハンミヤ島を探す。すると小さく砂浜の坂が見えてきた。ハンミヤ島だ。到着するとそこには船がつけられないらしく、50mほど泳いで渡ってほしいとのことだった。すぐさま海に飛び込み島へ向かった。到着すると遠くからはわからなかったが、思った以上に傾斜がきつい。しかしここまで来たのならと、砂浜を駆け上がる。歩くたびに砂が崩れ、3歩進んで2歩下がるような状態が続いた。てっぺんに着くころにはへとへとだったが、一切手をつかず足の力だけで登頂した大冨氏の脚力に驚いた。頂上にはさらにきれいな海の姿が待っていた。この苦労を味わったものだけ、天気にも愛されたものだけが見ることができる絶景だ。

キャンプを始めた当初、この島でキャンプをすることが夢であった。しかし実際に来てみると、キャンプをするにはやりづらい島である気がした。少しばかり景色を眺め、特にすることもないので下山した。船に戻る際はハンミヤ島周辺の海を水中眼鏡で目に焼きつけながら乗船した。

## 11 終わりに

帰り道、ライオン岩や海水が噴水のように吹きあがる岩、洞窟などを見せてもらいながら港へ着いた。念願のハンミヤ島に上陸できた記念すべき無人島キャンプ。もう思い残すことはないなと思いながらも、また無人島に行きたい欲求が湧きあがってくる。

奄美に赴任した5年間で4回の無人島キャンプを行なってきた。キャンプをするたびに、無人島それぞれが違う顔を持っていることに気付いた。砂の種類や、岩の形、海の深さなど新たな発見ばかりであった。そしてなにより、現代の文明が如何に便利であるかを痛感することができた。次はいつこのような体験ができるかはわからないが、その日の為に準備をしておきたいと思う。



写真11 ハンミヤ島  
島目前の一枚



写真12 ハンミヤ島  
島の傾斜